

週日の説教

金 大烈 神父 2011年10月13日(木)

《私の信仰が絶対に正しい!? ～あなたは大丈夫ですか～》

1986年に映画化された「薔薇の名前」という小説があります。ウンベルト・エーコという人が書いた小説で、原題はイタリア語で「Il Nome della Rosa」、英訳すると「The Name of the Rose」です。

その小説の内容を紹介させていただきます。

小説の舞台は、中世1327年の北イタリアのカトリック修道院です。その修道院は山の絶壁の上に建てられていて、たくさんの修道士が生活をしていました。

ある日、その修道院で殺人事件が起こります。殺人事件は1回で終わらず、繰り返し起こりました。修道院長はどうしたらよいか悩み、ローマの宗教裁判の捜査官であるウィリアムという修道士を呼びます。

ウィリアムが来てみると、全くわけの分からない殺人事件でした。山の絶壁の上に建てられた修道院なので、外部の者が入って来て殺人を犯す可能性はほとんどありませんでした。だから犯人は修道院の中の人物だろう、ということになります。そこで、いろいろなことを調べ、修道院の中の図書館と関係がありそうだ、というところまでたどり着きます。そしてついに犯人を見つけ出します。それは、修道院の中でも年配で地位も高いホルヘという修道士でした。

なぜホルヘがそのような殺人を起こしたのか調べてみると、彼は、神聖な修道院の中で笑い声が聞こえたり喜劇的な分かち合いが行われたりするのが大嫌いだったのです。「修道士ならばイエス様の十字架の痛みを感じながら償いの生活をするべきだ。それなのに、この修道院は修道院の精神を失って明るくなっている。」そのように思ったのです。修道士たちが何かをするときに笑い声を立て、笑顔になるのが気にいらなかったのです。そこでホルヘは、その時代に有名になったアリストテレスの喜劇の小説や笑い話、風刺的な物語の本、またそれらに関してよい評判を載せた全ての本に毒を塗ったのです。何の気なしにその本を手にとってしまった修道士はその毒によって死んだのです。

調査が終わり、捜査官であったウィリアムはこのように叫びます。「悪魔とは何だろう。それは、霊魂の高慢さ、そして微笑みを知らない信仰、疑いの余地がないと信じてしまう歪んだ信仰、これこそがまさに悪魔だ。」と叫びます。

意味のある話です。

なぜ今日この小説を紹介したのか、分かるでしょうか。

今日の福音(ルカ 11:47-54)でも、ファリサイ派の人々、律法学者たちがイエス様に叱られています。彼らはイエス様が亡くなられる時まで、ずっと聖書の中で叱られ続けます。そのファリサイ派や律法学者たちが表すものは何でしょうか。宗教的な独善、自分の考えに凝り固まっている心、そして

偽善的で排他的な振る舞い、そのような姿でした。それを見てイエス様は、今日の福音のように叱ったのです。

ある意味では、このホルヘという修道士の考え方は、私たちの心の中にもあるのかもしれませんが。「信仰とはこういうものだ。」と思いこみ、自分と違う考えの人に出会うと嫌な気持ちになります。そして「あの人はなぜそのような考え方を持っているのか。」と思い、その人を良い目で見ることが出来なくなるのが、私たちにもあるのではないのでしょうか。

そういう意味で、今日の福音でイエス様が気をつけるようにおっしゃったことに私たちも気づき、悟るべきではないかと思えます。

ホルヘは、「笑いはキリスト教の精神を失う原因になる。なぜ笑わなければいけないのか。なぜイエス様の死の痛みに与らないのか。」と考えました。そしてそれが病的になり、ついに殺人まで犯してしまったのです。

これはただの小説です。しかし小説というものは、真実でないもので真実を訴えるものです。小説の一つの目的は、“作り話によって真実を訴えることだ”とされています。ただの作り話ではなくて、あり得ることだと認める心が必要です。そして、自分にはそのような頑^{かたくな}な心はないか、それを振り返ってみる機会にすればよいのではないかと思ってみました。

ありがとうございました。